

令和5年度 学校経営計画に対する自己評価計画中間評価報告書

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	備考
1	生徒自身が自己の目標を見据え、課題に対して主体的・継続的に取り組む姿勢を養う。	①進路選択に係る講話や体験活動等とおして、キャリア意識の向上を促す。 [進路指導課] [各教科]	【成果指標】 生徒各自が目標を達成できた。  アドバンスクラス 模試偏差値  ベーシッククラス 漢字検定  キャリアコース 商業検定	模試における英数国合計の偏差値が55以上の生徒が受験者の  A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満  漢字検定準二級保持者の割合が  A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満  商業各種検定合格率が A 75%以上 B 65%以上 C 55%以上 D 55%未満	アドバンス [7月模試] 1年 C (33%) 2年 D (23%)  ベーシック D (22%) 2・3年 C (33%)  キャリア A (82%)	成 果：B1以上の生徒が1Aでスタサポより2増、2年で1年1月模試より1減である。 課 題：現状を維持しており、向上してはいない。生徒も進学意欲があまり高くなく、就職を希望している生徒も複数見受けられる。 改善策：朝学習のあり方や内容を再検討する必要がある。また、生徒の進路に対する意識改革が必要と思われる。  成 果：準2級保持者が41名中9名となった。合格に向けて主体的に学習する生徒が増え、2年生においては継続した漢検学習が行えている。 課 題：漢検対策の取り組みが統一できていない。担任の教科に左右されがちな学習状況を改善するため、学年間での連携を図る必要がある。 改善策：B組全体で「資格取得」の計画を立て、ポイントをおさえて課題に取り組む。また検定受験の目的や目標を明確化して学習意欲の向上を図る。  成 果：前半の検定で合格率の目標を上回ることができた。また、1級の合格者を出すことができた。 課 題：後半の検定は難易度も上がり、上級を受験する生徒も増えるため、A判定が出るように努めたい。 改善策：個に応じた課題の設定や計画的な補習、個別指導を充実させていきたい。

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	備考
1	生徒自身が自己の目標を見据え、課題に対して主体的・継続的に取り組む姿勢を養う。	[教務課] [各学年] [各教科]	【成果指標】 各クラスの1日の学習平均時間(各定期考査までの期間)が  アドバンスクラス 2時間以上 ベーシッククラス 1時間30分以上 キャリアコース 1時間30分以上	各クラス(コース)において基準を達成した生徒の割合が  A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	アドバンス <b>C</b> (54%)  ベーシック <b>D</b> (37%)  キャリア <b>D</b> (9%)	成果:今年度は家庭学習について定義をし、自己向上の機会を意識させた。また、B組の目標達時間成率が例年より高くなった。 課題:目標を持っている生徒と曖昧な生徒の二極化が見られる。今回C組の達成率が極めて低い。また、学習時間入力数が少ないことも課題である。 改善策:教師側が、短期的・中長期的な目標を示すことが必要である。自己の1日の生活を振り返らせるためにも、学習時間の入力をしっかりさせることが大切である。
	③教育ICT環境を活用し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実をとおり、確かな学力を養成する。		[ITC関連GIGAスタッフ] [各教科]	【努力指標】 ICT研修によってICT機器に習熟し、「GIGAスクール構想」に適った「新たな授業づくり」に積極的に取り組んだ。	ICT機器に習熟し、「GIGAスクール構想」に適った授業づくりに積極的に取り組んだ教員の割合が  A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	<b>A</b> (100%)  A43.7% B56.3%
2	規範意識と協調性を高め、自他を思いやる心を醸成する。	[生徒指導課]	【満足度指標】 規範意識を持って、自発的に行動することができたと考えている。	自分から主体的にTPOに応じた挨拶ができているか  A よく出来ている B 出来ている C あまり出来ていない D 出来ていない	<b>88%</b> (A+B)  A27.7% B59.8%	成果:本年度も、毎朝生徒玄関で登校指導(挨拶指導)を行っている。4月当初より、日々生徒に変化が見られ、朝の挨拶ができる生徒が増えている。 課題:学校ではしっかりと行っている挨拶を校外でもできているかという点、できていない生徒が少なからずいる(73.6%)。これは昨年度からの課題であり、今後指導していくことが必要である。 改善策:朝の指導を今後も継続していく。機会をとらえて生徒会の執行部やクラスの会長、副会長も参加して、生徒から意識の改善を図ることができるようにしていく。

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	備考	
2	規範意識と協調性を高め、自他を思いやる心を醸成する。	②学校行事や課外活動をとおり、多様性を尊重しながら協働できる姿勢を養成する。	[生徒指導課]	【満足度指標】 各種学校行事や体験活動により、良好な人間関係を築き上げるとともに、何事にも主体的に他者理解を通して取り組むことができるようになる。	学校行事を通して、自他を大切に する心を持てるようになったか  A よく持てるようになった B 持てるようになった C あまり持てない D 持てない	年度末に評価	成 果：本校では、生徒が活躍できる多くの活動を設定している。生徒達は意識を高く持ち、しっかりと取り組むことができている。 課 題：計画段階では、先生主導になることが多い。その段階から生徒主体でできるようにしていく。 改善策：計画各段階から生徒が主体的に取り組めるように、初期指導は最小限にとどめる。先生方はアドバイザーとしてかかわることを明確にして関わっていく。
3	地域との交流・連携を密にし、地域を理解し貢献しようとする姿勢を養う。	①地域資源(自然・人材・団体・企業)や他校種と連携し、地域理解を深め、探究する力を養成する。	[総探コーディネーター] [各学年]	【満足度指標】 生徒が課題意識を持って、積極的に地域と関わり、地域への理解を深めている。	課題意識を持って、積極的に地域と関わり、地域への理解を深めることができたと考える生徒の割合が  A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	B (74%)  A 19.5% B 54.0%	成 果：3学年が最終発表を終え、地域活性化について深く考える良い機会になった。1・2学年も発表会が良い刺激になった。 課 題：フィールドワークや現地調査の機会が少ない。調べ学習で終わる生徒が多い。 改善策：まずは、フィールドワークを中心に知識を深められるように環境を整える。1・2学年は中間発表に向けて、地域にある豊富な資源を活用し、穴水でしか学べないものを吸収する。
		②地域ボランティア等へ積極的に参加し、地域貢献意識を高め、課題解決力を養成する。	[生徒指導課] [総務課]	【満足度指標】 生徒がボランティア活動や地域行事に関わり、地域の活性化に貢献していると感じている。	ボランティアや地域行事に関わり、自己の活動に有用感を感じている生徒の割合  A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	年度末に評価	成 果：様々な行事が制限なく実施されはじめ、生徒が地域と関わる機会が増加し、長谷部まつりをはじめとする行事に多数の生徒が参加することができた。 課 題：地域行事への積極的に参加しようとする生徒は数名である。地域との関わりをもち、様々な行事に貢献していきたいという思いの醸成を図ること必要である。 改善策：一人ひとりが地域行事に参加する機会を設けることで、そこでしか味わえない達成感や有用感を持たせる。

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	備考	
3	地域との交流・連携を密にし、地域を理解し貢献しようとする姿勢を養う。	③ホームページ等で、教育活動や生徒の様子を積極的に情報発信する。	[総務課]	【満足度指標】 ホームページや学校だより等を通して、適切に学校情報や教育活動の様子が発信されている。	学校情報や教育活動の様子を知ることができる情報発信が、適切になされていると感じている保護者の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	A (96%)  A64.4% B31.1%	成果：行事予定の情報を共有しながら役割を明確にし、積極的な情報発信に努めることができた。 課題：今後も計画的にスピード感をもって積極的な情報発信に努めていきたい。 改善策：行事だけを取り上げるのではなく、実際に体験した生徒の声を届けていきたい。
4	学校の教育力向上のため、組織力を高め、教師力の充実を図る。	①授業改善と資質向上に意欲的に取り組むとともに、組織的思考力や組織的行動力を高める。	[全職員]	【努力指標】 年4回の互見授業ウィークを設定し、それぞれ2回以上参観することとし、本校の授業の質向上を図る。	互見授業ウィーク中2回以上参加した職員の延べ割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C  (72%)	成果：各教員が共通の視点をもって参観し、授業改善の助言をするなど、互いに授業者だけではなく、参観者も自己の授業を振り返るよい機会となっている。 課題：積極的に参加する教員とそうでない教員の差が大きい。 改善策：取り組みの意義や目的をふまえた積極的な参加が教育力効果向上につながることを周知し、積極的な参加を促す。
			[若手教員早期育成プログラムコーディネーター]	【成果指標】 年間研修計画に即して、研修を実践する。各期の若手が確実に力をつけるとともに若手教員が講師を行う場面を設定する。	校内研修の実施回数（互見授業研究・講師役も含む）が A 25回以上 B 20回以上 C 15回以上 D 15回未満	年間計画の実施状況で判定 (下半期後に判定)	成果：計画通り1学期計画分の研修は、ほぼ終えることができた。特に若手教員による学校案内ポスターやパンフレット作成は、研修として定着してきている。この活動は、より深く学校を知るために必要な活動として有効である。 課題：1学期研修分で、唯一行うことのできなかつた「管理職からの話・意見交換」は、とても大切な校内研修の場なので、年内に時間をとって開催する必要がある。 改善策：上記研修は、2学期の中間面談までに行いたいと考えている。

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	備考
4	学校の教育力向上のため、組織力を高め、教師力の充実を図る。	[全職員]	<b>【成果指標】</b> 各種業務の精選や重点化等を意識し、組織として効率よく効果的に業務に取り組んでいる。	教員一人あたりの月平均時間外勤務時間が昨年度より  A 5%以上減少した B 3%以上減少した C 1%以上減少した D 減少できなかった	<b>A</b>  (9.3%減少)	成 果：4～7月の4ヶ月比較で、月平均時間外勤務時間が昨年度の41.7時間から今年度は37.8時間に減少した。80時間を超える時間外勤務者は現在までに1人もいない。 課 題：時間外勤務が20時間未満の職員と、60時間以上の職員が同程度あり、業務配分において多少の差が生じている。 改善策：部活動の内容等による時間差はやむ得ない面もあるが、課業務については組織として協力して遂行するようにしたい。時間外勤務については、学校が活性化しつつ、職員のやりがいと心身の健康が保持される事を目指すべきで、単なる時間減少ではないと考えたい。
	③危機管理意識を高め、緊急時にも適切に対処できる学校組織を構築する。	[全職員]	<b>【努力指標】</b> 想定される危機や生徒問題に備えた対応や対策ができるよう、効果的な校内研修会が行われている。	研修会により、具体的な危機や生徒問題への対応の仕方が把握できたと考える教員の割合が  A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	<b>A</b> (100%)  A50.0% B50.0%	成 果：5月の珠洲方面の地震では休日における動員があり、職員研修では心肺蘇生法、配慮を要する生徒への対応について実施した。また、地震の際の身を守る行動の確認等を1学期に2回実施した。 課 題：多様な危機に対応する危機管理マニュアルの周知と、具体的場面での実践力の育成を継続して行う必要がある。 改善策：学校においての一番の重要事項が安心安全に学べる環境を整えることであるとの認識を常に持ち、自然災害における生徒の安全確保、生徒問題を未然に防ぐための些細な変化を感受する事や、職員間での情報共有について徹底を図っていく。